

日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究 (B)
(2015 年度-2017 年度、研究課題/領域番号 15H03224)

「アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した
通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究」の概要と活動実績¹

**Summary and Activities of the Research Project:
«Comprehensive Study of Cross-linguistic Proficiency Evaluation Methods
with special consideration for the socio-cultural diversity of Asian Languages»**

研究代表者 富盛伸夫
TOMIMORI, Nobuo (Project Leader)

1. 本研究プロジェクトの研究課題と問題設定

ヨーロッパ連合（以下、EU）では、その将来を担う次世代にヨーロッパ市民意識と資質・能力の育成をはかるため一連の教育改革を進めている。とりわけ、EU 域内学生のモビリティを担保し外国語教育改革の基盤をなす政策が「ヨーロッパ共通参照枠組み」（Common European Framework of Reference for Languages、以下 CEFR）であり、2003 年にガイドラインが示されてから約 15 年を経て、その理論面・実践面の実績（行動中心複言語主義、コミュニケーションタスクと解決能力の育成など）は急速に進展し言語教育の現場そのものを変容させた。他方、ヨーロッパの言語的あるいは社会文化的に均質な土壌に育まれた言語コミュニケーションの同質性はそのまま CEFR の基底概念に反映されている。

現在まで、日本語を含め非 EU 言語への CEFR の適用可能性の先行的研究は十分ではなく、かつ、文字体系・音声・文法など言語類型の特徴の差異や社会・文化的ギャップを考慮した通言語的測定尺度としては成熟していない。我々にとって喫緊の課題は、非 EU 言語の教育現場にも適用可能な新たな評価方法の開発が重要であり、日本やアジア諸国の言語教育の当事者が研究活動を焦点化することで、EU の研究者がなしえない、より汎用性のある通言語的な共通枠組みを開発し、EU はじめ日本のみならず関係国際機関などに提案する可能性を拓くことができるのではないかと考える。

本研究の目的は、

- 第 1 に、アジア諸語を主たる対象とし、その社会・文化的多様性を考慮した言語コミュニケーション能力評価方法を研究することにより、より汎用性の高く通言語的かつ透明性の高い言語能力評価システムを研究する。
- 第 2 に、実施約 15 年を経た CEFR の再検証と EU 内で進む社会・文化的コミュニケーション能力を勘案した CEFR 改訂に関する最新動向を調査の上、本研究に活用し国際的に提案する。
- 第 3 に、外国語教育に関する高等教育と中等教育との接続や生涯教育への応用など、現代日本社会のニーズにも対応した成果を社会に還元することも研究の展望としてもっている。

¹ 本稿は本科研プロジェクトの全体構想と研究体制の形成や経緯などについては重複を避け、科研活動の実績報告を中心にまとめたものである。プロジェクトの趣旨、経緯、活動計画などの詳細は東京外国語大学語学研究所のサイト内にリンクされている協働科研一覧から参照できる。（<http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/site0008/index.html>）

なお、研究の分野・範囲を示すキーワードを記すと以下のとおりである。（順不同）

- (1) 外国語教育 (2) 言語能力評価法 (3) CEFR (4) 通言語的透明性
(5) アジア諸語 (6) 社会・文化的特質 (7) 言語類型 (8) 異文化間コミュニケーション能力

2. 研究体制

(1) 研究計画に対応した 3 つの作業班を組織し、分担者は専門研究領域において計画遂行に向けて協働した。

(A 班) アジア諸語地域の社会・文化的多様性を考慮した通言語的かつ透明性の高い言語能力評価システムの開発研究を目的として、アジアの諸大学での外国語教育システム立案者や言語教育従事者（教師等）に対する現地調査により、Web や二次資料の情報では得られない信頼度の高い情報が入手できた。また国際シンポジウムや国際ワークショップの開催により、「アジア・アフリカ研究教育コンソーシアム」（CAAS）加盟大学およびアジア諸大学からの研究者とともに、CEFR の能力評価記述文（descriptors）の妥当性を評価した。

藤森弘子（日本語担当）、南潤珍（韓国語担当）、田原洋樹（ベトナム語担当）、上田広美（カンボジア語担当）、野元裕樹（マレーシア語担当）、岡野賢二（ビルマ語担当）、萬宮健策（ウルドゥー語担当）、丹羽京子（ベンガル語担当）、吉枝聡子（ペルシャ語担当）、矢頭典枝（アジア英語担当）、拝田清（オセアニア地域、世界英語論担当）

(B 班) EU 等ですすめられている社会文化的コミュニケーション能力の育成と異言語・文化間の仲介（mediation）の評価法開発にかかわる最新研究動向を把握し、CEFR の非 EU 言語への適用妥当性の再検証および社会文化的コミュニケーション能力評価法開発にかかわる最新動向調査を行なった。その成果を A 班と共同し国内外の学会・研究集会で成果発表を行なった。

富盛伸夫（研究総括、EU の言語教育政策担当）、根岸雅史（英語教育、CEFR、CEFR-J 担当）、成田節（ドイツ語圏の CEFR 研究担当）高垣敏博（スペイン語圏の CEFR 研究担当）、矢頭典枝（アジアの英語変種研究、社会言語学担当）

(C 班) 国内の先進的な外国語教育に取り組む高等学校や教育委員会に聞き取り調査を行い、中等教育との接続および中等教育及び社会的ニーズに対応した外国語能力到達度評価法に関する研究を行なった。

山崎吉朗（研究協力者：一般財団法人日本私学教育研究所主任研究員、中等教育における外国語教育研究）、富盛伸夫（生涯教育における到達度評価法）、根岸雅史（中等教育英語教育）

(2) 東京外国語大学が参加する「アジア・アフリカ研究教育コンソーシアム」（CAAS）加盟大学との研究協力体制は本研究でも活用した：シンガポール国立大学言語研究センター、フランス・国立東洋言語文化学院、ライデン大学日本語専攻科、韓国外国語大学外国語教育研究所等。

(3) 国内外の言語能力評価法研究分野の専門家との協力体制により講演会、シンポジウムへの参加を含む研究協力が得られた：国内の CEFR 研究グループ（東京外国語大学 CEFR-J、JLC 日本語スタンダード等）、立命館アジア太平洋大学、神田外語大学など。

(4) 統括評価班を設置しプロジェクトの円滑な遂行のため、分担者が委員となる運営委員会を組織し定期的に開催（計 5 回）したほか、随時メールなどによる稟議で意思疎通を図った。代表者富盛が総括的責任を担い、研究計画に従って円滑かつ効果的に運営できるように常時情報の共有を図り全体的な研究遂行の管理・調整を行なった。代表者は研究に支障が出ないように研究拠点の確保などに配慮し適切な対応をすることができた。

3. 研究活動概要

3.1. 国際研究集会の開催

3.1.1. 国際ワークショップ「卓越した外国語教育科学」（共催）

2015(平成27)年8月1日・2日に共催者として参加、富盛伸夫と YI Yeong-il は以下の研究発表（英語）を行なった。本科研では香港教育学院から講演者を招聘して研究交流を行なった。

「The 3rd International Workshop on Advanced Learning Sciences (IWALS-3 Tokyo, 2015)」

日時：2015（平成27）年8月1日、2日 9:00～17:30

会場：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所大会議室

発表：「Trends in CEFR Self Assessments by Native Speakers and learners of Asian Languages and issues concerning Proficiency Descriptors — A 2014 Learner Survey-based Study—」

発表者：富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授）、YI Yeong-il（東京外国語大学大学院博士前期課程）

※本国際ワークショップに本科研で招聘した Hintat Cheung 香港教育学院教授の発表題目は、

「CEFR in Taiwan and in Hong Kong: What and What not adopted」。他の研究発表の詳細は省略。

※主催：東京外国語大学「学習の可視化・多様化を指向したe-Learning 教育システムの開発と教育の高度化」事業

※共催：国立台湾師範大学, Pennsylvania State University The Advanced Center for the Study of Learning Sciences, 科学研究費助成事業基盤研究B(50122643)（研究代表者：富盛伸夫 本学名誉教授）「アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究」、科研基盤(B)「多言語コーパスの構築と言語教育への応用可能性」(川口裕司代表)、科研基盤(B)「英日中国語ウェブ誤用コーパス構築と母語をふまえた英語・日本語・中国語教授法開発」(望月圭子代表)、国際日本学研究所国際日本語教育部門

3.1.2. 国際シンポジウム「外国語教育における能力指標 —CEFR と日本語教育—」（共催）

2016（平成28）年3月18日に開催。科学研究費助成事業基盤研究（B）「アカデミック日本語能力到達基準の策定とその妥当性の検証」（研究代表者：藤森弘子）と共催し、「アジア・アフリカ研究コンソーシアム」（CAAS）参加大学であるオランダ・ライデン大学やシンガポール国立大学からの招聘講師とともに富盛伸夫、藤森弘子らが発表し CEFR の能力評価基準や Can-do 自己評価について議論した。

「外国語教育における能力指標 —CEFR と日本語教育—」

「Issues in Foreign Language Proficiency Scale with focus on CEFR and Japanese Language Education」

日時：2016（平成28）年3月18日 13:30～17:30

会場：東京外国語大学 アゴラグローバル3階プロジェクトルーム

招待講演1「欧州の日本語教育における CEFR の最新事情」

講演者：吉岡慶子：オランダ・ライデン大学地域研究科日本研究専科日本語教育部門 部門長（Lecturer）

招待講演2「シンガポールにおけるビジネス日本語教育に関わる社会・文化的諸問題」

講演者：ウォーカー・泉：シンガポール国立大学語学教育研究センター所長補佐（Senior Lecturer）

研究発表1「アジア諸語学習者における CEFR 自己評価と社会・文化的コミュニケーション能力の測定指標の開発」

発表者：富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授）、YI Yeong-il（東京外国語大学大学院博士前期課程）

研究発表2「国内外の日本語学習者による Can-do 自己評価の比較分析」

発表者：藤森弘子（東京外国語大学教授）、鈴木美加（東京外国語大学准教授）

※主催：科学研究費助成事業基盤研究B(50122643)（研究代表者：富盛伸夫 本学名誉教授）「アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究」、科学研究費補助金基盤研究B(26284070)（研究代表者：藤森弘子 本学教授）「アカデミック日本語能力到達基準の策定とその妥当性の検証」

※共催：東京外国語大学 語学研究所

※後援：Consortium for Asian and African Studies

3.1.3. 国際ワークショップ：「言語教育（CEFR）国際ワークショップ」

2017（平成29）年9月26日に本科研プロジェクトが主催者として開催。この国際ワークショップは、アジア諸語の言語的特性や社会・文化的特質を考慮した適用可能性を俎上にのせ、取りうる方策の検討を試みた。EUにおける最新の CEFR 改訂動向を紹介するとともに、東京外国語大学で Super Global Campus プロジェクトの一環として進められている、高等教育レベルで多言語教育を行なう 27 言語に応用した CEFR-J の導入計画が紹介された。学習者の複数言語使用や学習動機・ニーズに対応した EU での CEFR

改訂は本科研プロジェクトの問題意識と同じ方向性を持ち、多言語使用社会を前提にした複言語使用者の言語行動における異言語・異文化間コミュニケーション能力の再概念化、さらには CEFR 研究を契機に言語教育の本質的意味を改めて問い返す研究展望が開けた。

「言語教育(CEFR)国際ワークショップ —CEFR の受容と適用可能性をめぐる—」

日時：2017（平成 29）年 9 月 26 日 15:00～19:20

会場：東京外国語大学 語学研究所（研究講義棟 4 階 419 号室）

講演 1「EU における CEFR 改訂の最新動向について」

発表者：根岸雅史（東京外国語大学教授）

講演 2「東京外国語大学の言語教育プロジェクト, CEFR-J X 27 の現在と展望」

発表者：投野由紀夫（東京外国語大学教授）

研究発表 1「タイ語教育スタンダード化に向けての CEFR 導入の課題」

発表者：スニサー ウィッタヤーパンヤーノン(齋藤)（東京外国語大学特任外国語教員）

研究発表 2「アジア諸語への CEFR 導入に関わる諸問題 —ミャンマーでの言語教育調査から—」

発表者：岡野賢二（東京外国語大学准教授）、トゥザ ライン（東京外国語大学大学院博士後期課程）、
富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授）

「総合討議 —CEFR の受容と適用可能性をめぐる—」（問題提起と司会：富盛伸夫）

※共催：科学研究費助成事業基盤研究(C)「東南アジア語圏におけるヨーロッパ系言語との接触・混成現象に関する動態的記述研究」(研究代表者：黒澤直俊)、スーパーグローバル大学創成支援事業(東京外国語大学:「世界から日本へ、日本から世界へ —人と知の循環を支えるネットワーク中核大学—」、大学教育再生加速プログラム・テーマV「卒業時における質保証の取組の強化」(東京外国語大学)、東京外国語大学語学研究所

3.1.4. 国際研究集会（特別講演会）

2016（平成 28）年 7 月にタイの言語教育専門家を講師に招いて国際研究集会を開催した。分担者根岸雅史はタイにおける現地調査の報告として、特にタイでの日本語教育が直面する言語・文化的ギャップに関する一層の認識と解決取り組みの方策が議論された。富盛伸夫と YI Yeong-il は TUFs 言語モジュールを活用したアジア諸語の社会文化的言語能力指標開発の提案をした。

国際研究集会（特別講演会）

日時：2016（平成 28）年 7 月 15 日 17:30～21:00

会場：東京外国語大学 語学研究所（東京外国語大学府中キャンパス 研究講義棟 4 階 419 号室）

研究報告「TUFs 言語モジュールを活用したアジア諸語の社会文化的言語能力指標について」

報告者：富盛伸夫(東京外国語大学名誉教授)、YI Yeong-il (東京外国語大学大学院博士前期課程)

特別講演「タイの言語教育現場での社会文化的摩擦」

講演者：Dr. Soysuda, NA RANONG（タイ国立カセサート大学東洋言語学科准教授）

研究発表「タイにおける日本語教育に関する調査報告 —タイ人学習者にとっての日本語の社会文化的特質—」

発表者：根岸雅史（東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授）

総合討議・質疑応答（司会進行：富盛伸夫）

※共催：東京外国語大学 語学研究所

3.2. 上記以外の研究集会（研究会）

3.2.1. 科研基盤研究(C)「東南アジア語圏におけるヨーロッパ系言語との接触・混成現象に関する動態的記述研究」（研究代表者黒澤直俊）との共催による研究会・講演会

旧植民地時代の言語・文化的レガシーとして EU 言語を継承するアジアの複言語使用状況と複層的社会・文化的特質を研究対象として共同研究することにより、新たな研究展望への示唆が得られた。

共同研究会

日時：2016（平成 28）年 12 月 2 日 18:30～20:30

会場：東京外国語大学 語学研究所(研究講義棟 4 階 419 号室)

研究発表 1「TUFs 言語モジュールを活用したアジア諸語の社会文化的特質の考察と指標化」

富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授）、YI Yeong-il（東京外国語大学大学院博士前期課程）

研究発表2「ベトナム語教育における heritage と legacy」

田原洋樹（立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部准教授）

研究発表3「Tagalog, Taglish, English, そして Chabacano —カオスの中のアイデンティティー—」

荻原 寛（東京外国語大学大学院特別研究員）

総合討議・質疑応答（司会進行：富盛伸夫）

※共催：東京外国語大学 語学研究所

講演会「アジアの少数言語の継承と言語教育」

日時：2017（平成29）年1月27日 18:00～20:30

会場：東京外国語大学 語学研究所（研究講義棟4階419号室）

講演1「アジアにおけるポルトガル語とその言語・文化の継承 —マラッカの言語 Kristang 語—」

発表者：富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授）

講演2「ポルトガルがマカオに残した記憶と遺産 —『マカエンセ』という人々—」

発表者：内藤理佳（上智大学常勤嘱託講師）

総合討議・質疑応答（司会進行：富盛伸夫）

※共催：東京外国語大学 語学研究所

3.2.2. 研究交流の場としての研究会の開催

本プロジェクトの日常的な活動として随時研究情報の交換や交流の場として語学研究所を拠点に研究会を開催した。2015（平成27）年7月の第1回研究会から2017（平成29）年9月までに、合計5回の研究会・研究集会を行なった。本科研による研究会・研究集会はいずれも東京外国語大学語学研究所の共催である。詳細は、本科研のWebサイトを参照されたい。

第1回研究会

日時：2015（平成27）年7月17日 18:00～19:00

会場：東京外国語大学 語学研究所（東京外国語大学府中キャンパス 研究講義棟4階419号室）

研究発表：「アジア諸語学習者における CEFR 自己評価の傾向と能力記述文の問題点

—東京外国語大学学習者アンケート調査2014の事例から—」

発表者：富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授）、YI Yeong-il（東京外国語大学大学院博士前期課程）

※共催：東京外国語大学語学研究所

第2回研究会

日時：2015年11月6日 18:00～19:30

会場：東京外国語大学 語学研究所（東京外国語大学府中キャンパス 研究講義棟4階419号室）

研究発表：「アジア諸語に適用した CEFR 能力記述文と社会・文化的指標の開発」

報告者：富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授）

調査報告：「アンケート調査のツールとしてのエコ・スマートペン（学研）の活用法」

報告者：山崎吉朗（一般財団法人日本私学教育研究所主任研究員）

※共催：東京外国語大学語学研究所

第3回研究会・特別講演会

上記、3.1.4. を参照。

第4回共同研究会

上記、3.2.1. を参照。

第5回研究会

2017（平成29）年7月14日 18:00～20:00

会場：東京外国語大学 語学研究所（研究講義棟4階419号室）

調査報告：「調査報告：長崎県における多言語教育と日本の外国語教育政策の最新動向」

発表者：山崎吉朗（JACTFL 理事長／一般財団法人日本私学教育研究所主任研究員）

研究発表：「ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)はアジア諸語に適用しうるか？—社会・文化的特質の観点から—」

発表者：富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授）

3.3. 主な現地調査活動とその成果(研究集会等への出張を除く)

研究分担者根岸雅史は、2016(平成28)年3月に国際交流基金バンコク日本文化センターを訪問、アジア諸語教育におけるCEFR適用にかかわる動向調査をバンコクで行うとともに日本語教育関係者に本科研に関する成果を公開した。この調査は研究会で報告された。

調査者：根岸雅史

期間：2016(平成28)年3月17日～3月20日

訪問機関：国際交流基金バンコク日本文化センター

研究代表者富盛伸夫と分担者岡野賢二は、ミャンマーの大学と語学学校でCEFR適用の妥当性およびビルマ語検定試験についての現地調査を行なった。特にヤンゴン外国語大学では本科研の課題内容に関わるプレゼンテーションを富盛が行い、アジア諸語などを担当する言語教育専門家たちと社会・文化的特質の重要性について発展的な意見交換をした。

調査者：富盛伸夫、岡野賢二

期間：2017(平成29)年2月8日～2月13日

訪問機関：ヤンゴン外国語大学、ヤンゴン大学、ヤンゴン市内日本語学校

日本国内の調査活動としては、高等教育と中等教育との接続、特に多言語教育を実践している高等学校への現地聞き取り調査を重点化した。研究協力者の山崎吉朗(一般財団法人日本私学教育研究所主任研究員)は2回にわたり、国内の英語以外の外国語教育に取り組む九州地区の高等学校や教育委員会を訪問し聞き取り調査から有益な知見が得られた。特に長崎県内の離島地域において推進されている外国語(中国語、韓国語)教育の実態把握と課題について分析し研究会で発表した。

調査者：山崎吉朗

期間：2016(平成28)年1月31日～2月4日

訪問機関：壱岐高校、長崎県教育委員会、学校法人向陽高校

調査者：山崎吉朗

期間：2017(平成29)年1月16日～1月20日

訪問機関：学校法人向陽高校、長崎県教育委員会、長崎県立対馬高校

3.4. 研究活動の成果公開と総括

3.4.1. 2015(平成27)年度

本プロジェクトでは上記の研究集会開催の活動以外に、対外的成果発信に重点をおいてきた。

2015(平成27)年11月29日に開催された外国語教育学会(JAFLE)第19回研究報告大会において、富盛伸夫とYI Yeong-ilは本科研の研究成果として「アジア諸語学習者における言語別CEFR自己評価の傾向と社会・文化的コミュニケーション能力の測定に関わる諸問題 ―学習者アンケート調査(2014)の分析から―」を発表し、東京外国語大学で行なったアジア諸語学習者アンケートの分析を通して、言語類型の異なりや語用論的ストラテジーを配慮した「社会・文化的コミュニケーション能力」に対応した通言語的能力評価尺度設定の問題点を論じた。

3.4.2. 2016(平成28)年度

アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した言語能力の評価方法の研究、および異文化間言語コミュニケーション能力の記述に有効な指標を抽出する試みを行うため研究交流を推進した。当初の計画にもとづき、国際研究集会(特別講演会)を開催し研究成果の公開を図った。ミャンマー等のアジア諸国で言語教育研究者に本科研の活動内容を公開し聞き取り調査を行うことにより、CEFR受容の進捗状況を

把握するとともに、アジア諸語の教育で現場教師と学習者が直面する言語・文化的諸問題の解決取り組みの方策を検討することができた。

2016(平成 28)年 12 月 18 日に開催された外国語教育学会(JAFLE)第 20 回研究報告大会において、富盛伸夫と YI Yeong-il は研究成果として「TUFs 言語モジュールの会話文を活用したアジア諸語の社会・文化的特質の指標化」を発表し、学習コーパスから新たな CEFR Descriptors を作成するための指標化について成果公開した。

上記 3.1.2. に記載した国際シンポジウムの成果物として、『アカデミック日本語能力到達基準の策定とその妥当性の検証—成果報告書(2017)—』が 2017 年 3 月に刊行された。(科学研究費助成事業 基盤研究(B)課題番号 26284070 研究代表者:藤森弘子「アカデミック日本語能力到達基準の策定とその妥当性の検証」成果報告書 pp.29-46 に掲載。)

上記 3.4.1. に記載した外国語教育学会での成果発表「アジア諸語学習者における CEFR 自己評価の傾向と社会・文化的コミュニケーション能力に関わる諸問題—学習者アンケート調査(2014)の分析から—」は、紀要『外国語教育研究』No.19(2016), pp.1-18. に掲載された。

3.4.3. 2017(平成 29) 年度

最終年度として、前年度までの実績に基づき、研究課題の遂行を進めた。特に、語用論的ストラテジーや談話構成などアジア諸語地域の多様な社会的・文化的特質を踏まえた適切な言語コミュニケーション能力測定方法を重点的に研究し試案を公開した。

国際的連携を強化しつつ研究成果は関係学会や国際集会(台湾師範大学)での発表を通じて問題提起をするとともに、台湾および中国における言語教育への CEFR 導入についての情報収集と意見交換ができた。加えてウェブサイト上での成果公開に努めた。

«The 4th International Workshop on Advanced Learning Sciences (IWALS-4 Taipei, 2017)»での発表(招待講演)

日時: 2017(平成 29)年 7 月 10 日

会場: 台湾師範大学

発表タイトル: «Is CEFR applicable to Asian languages? - Proposals of necessary improvements from a socio-cultural point of view -» (英語)

発表者: Nobuo Tomimori, Tokyo University of Foreign studies

上記 3.4.2. に記載した外国語教育学会での成果発表「TUFs 言語モジュールを活用したアジア諸語の社会・文化的特質の指標化」は、紀要『外国語教育研究』No.20(2017), pp.207-217. に掲載された。

上記 3.1.3. に記載した 2017(平成 29)年 9 月 26 日開催の「言語教育(CEFR)国際ワークショップ—CEFR の受容と適用可能性をめぐって—」の成果公開は、本報告書の第二部および Web サイトで公開している。

3.4.4. 総合的自己評価と総括

2015(平成 27)年度は東京外国語大学語学研究所を拠点として、国際シンポジウムや国際ワークショップを前倒しに開催するなど当初の計画以上に順調に遂行された。アジア諸語教育に関わる各分担者はアジアの多様な社会・文化的コンテキストを通言語的枠組みの中に捉えるために必要となるコンテキスト分析、談話ストラテジーやボライトネスの表れ方など、語用論的研究を協働して推進し次年度の研究準備をすすめた。

2016(平成 28)年度以降は研究成果を共有するために発信活動にも努力し、Web サイトを構築した。また、ミャンマー等の現地で言語教育研究者に本科研の活動内容を公開し聞き取り調査を行うことにより、CEFR 受容の進捗状況を把握するとともに、アジア諸語の教育で現場教師と学習者が直面する言語・文化的諸問題の解決取り組みの方策を検討し成果を公開することができた。

国内調査では中等教育と大学教育との接続に関わる問題を先進的な複数のアジア諸語教育に取り組む長崎県教育委員会と県内離島の高等学校で聞き取り調査を行い、分析結果を公開した。

2017（平成 29）年度は外国での成果発表や研究活動の集約としての国際ワークショップを開催するなど、研究成果を対外的にも発信し研究交流にも務めた。研究代表者富盛と研究参加者は協働して、年間数回の書面アンケートあるいは直接の聞き取り調査により、語用論的ストラテジーや談話構成、また欧米地域とは異なる言語行動や *phatic* な要素などアジア諸語の多様な社会的・文化的特質を分析的に把握した上で、CEFR の能力記述項目に反映するような指標抽出の試みを行なった。

3 年間の研究期間の成果を国内外の関係学会・研究集会および Web 上で公開したことで問題の喚起を図るなど、研究の進展は順調であったと評価している。

総括して、当初の目的と計画に従って課題研究の円滑な実施につとめることができ、研究活動は全体として順調に進展したといえる。

4. 謝辞

本研究は研究代表者及び分担者・研究協力者の多くが所員として活動する東京外国語大学学内共同利用施設「語学研究所」を主たる研究上の拠点とすることで、研究の遂行に必要な機器などの設備、研究会やセミナー等を開催するための研究空間などの便宜が受けられ、研究コスト節減とともに研究環境の利点が与えられた。最終年度 2018（平成 30）年 3 月に研究成果報告書を刊行できたのも語学研究所を研究拠点とさせていただいたおかげである。

上記研究所は Web サイト²を通して言語学・言語教育学の研究成果を社会に向け常時閲覧可能としているが、本科研の成果も、同 Web サイトから成果を公開している。この成果発信のための便宜をはかっていたらいる東京外国語大学語学研究所に感謝の意を表する。

事務補佐の深尾啓子さん、YI Yeong-il さん、トゥザ ラインさんに日常的な研究活動の支援と成果報告書の準備にひとかたならぬご尽力をいただいたことを深く感謝して記します。

² 東京外国語大学語学研究所のサイト（<http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/index.html>）を参照。